まさか俺の推しメイドがこんな近くにいたとは

ハイネ1021

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

俺の好きなものはただ一つ。

美少女。それに尽きる。

都内にある隣見川高校に通う高校２年、真坂直人は成績優秀、運動神経抜群、ルックスもそこそこよし、人望もそこそこのハイスペック人間だが、チャラい男女が大の苦手で美少女大好きな残念なオタクであった。

真坂はある出来事をきっかけにメイドカフェに通い詰める日々を送っていたが、そんな彼に人生が１８０度回転するような出来事が突如訪れる?!

美少女だらけの萌え×２（？）ラブコメ青春（？）ストーリーが

今ここに！

目次

ご帰宅1回目！ ―― 1
ご帰宅2回目！ ―― 20
ご帰宅3回目！ ―― 33

ご帰宅1回目！

人は辛い時あるいは嫌なことがあったとき何かに縋りたくなったり、どこか拠り所を見つけたり、癒しや安らぎを求めたくなるものだ。

その対象は人それぞれ違うだろう。

しかし大抵の人は各々趣味に落ち着くと思う。

まぁ自分の好きなものには我を忘れるほど夢中になれたり、そればかりに没頭できるしな。

なによりありのままの自分でいられる。

さて、俺はこんなことを語って何がいいたいのか。

結論を言おう。

俺が好きなものはただ一つ。

美少女。それに尽きる。

そして、ーーー

「「お帰りなさいませ、ご主人様♡」」

ーー俺は今、こうして
メイドカフェに通いつめる日々を送っていた。

まさか俺の推しのメイドがこんな近くにいたとは（ご帰宅1回目）

俺の名前は真坂直人。
都内の隣見川高校に通う高校2年生である。
高2と言っても、今日が新学期なので実質なりたてではあるが。
成績は学年10位、スポーツテストではA評価、人望も…まぁそこそこよしとみた。
学校生活はまぁ人並みには充実してると言ってもいい。

しかし、
そんな俺にも苦手なものがある。
それは、式も終わりクラス替えも済んでやっと落ち着けたかと思ったその時に目にした。

男子生徒１「お、進級早々のお前の髪型イケテネ?!ウェーイ!!」

男子生徒２「だろぅ?これで瀬川さんにアタックしちゃおーかな。」

女子生徒１「えーナニソレウケル～ｗｗｗ」

男子生徒３「おめーちょーし乗んなよぉ～、お前があの超絶美少女の瀬川にｏｋもらえるわけねぇーだろぅ?」

男子高校生２「と思うじゃん??こーゆーのはノリが大事なんだって!」

そう。俺はこういったノリをした奴ら、いわゆる「ウェイ系男子」、

「ウェイ系女子」が大の苦手である。

彼らのノリには正直ついていけない。
ていうより意思疎通を図れそうにない。

なにしろ彼らには自分の確固たる意志というものを持ってないように思える。

別に考えは人それぞれだし否定する気はないが、ただ人に流されていき、
いかにもミーハー臭が漂うような場の雰囲気が俺にはどうも気に食わなかった。
一言で言えばアイデンティティ、
つまり彼らには「自分らしさ」というものが全くと言ってもいいほど見受けられないのだ。
特に趣味に関してはそれが顕著だ。
前に一度、彼らのような人間と俺に
こんな出来事があった。
ーーーー。
確かあれは中学3年の頃。

オタクと言われるのにちょっと慣れてきた頃のことだ。
当時俺はちょっと萌え要素の強いアニメに俺はハマっていた。
そのアニメキャラの柄のした筆記用具を使ってたのを見られたせいか、ある男子生徒からこんなことを言われた。
男子「お前さ、なんでそんなアニメみてんの？」
主人公「なんでって…、好きだからに決まってるでしょ。
男子「え、マジかよ…。
ちょっとないわー…。」
彼は引き気味でそう言った。
その時彼には腹が立った。
そのアニメを1ミリ足りとも知らないくせにそんな発言をすることが。
しかしなんとか気持ちを抑えて俺はこう問いた。
主人公「悪かったな。
じゃあ聞くけど、そういう君こそどうしてそんな歌手が好きなのさ。」
男子「そんなの決まってるだろ。
流行りだよ。流行に乗れなきゃみんなの話題についていけないだろ？

そんなの悲し過ぎるじゃん。」
飽きれた。
それを聞いた俺はこいつに言葉を返すのも馬鹿馬鹿しくなった。

ーーー。
と、言った具合だ。
それ以来この種の人間とは必要な話以外は口を開くこともなければ、聞く耳も持たなくなった。
その点、彼らが馬鹿にしてるオタクという人種はなかなか侮れないものだ。
彼らは自分の好きなものにはとことん追求しその愛する心の深さと言ったら計り知れないのだ。
もちろんその度合いはライトからヘビーな人まで、人によっても違うわけだが、彼らが夢中になってる姿を見てると俺はどことなく安心する。

時にそれが過剰になっていることがたまに傷で、世間の目はそれを見て
「オタク＝気持ち悪い」
なんて構造が成り立ってしまっているのは事実だ。

実際、数年前までの俺もその一人だったしな。

しかし蓋を開けてみると、
彼らはみんなそれぞれ個性豊かでいい人たちばかりだった。
みんなが一等星のように輝きを放っているようにみえた。

そして何より自分の好きなものを好きだと表現できる。それが例えさらにその「好き」を共有することができる。
こんなに素晴らしい世界があると知った時は感動したよ。

…おっと失礼。
これ以上話を長くするとキリがないな。これは俺の悪い癖だから直さないとな。

俺はすることもなかったので、
彼らの話の続きに耳を傾けてみた。

男子生徒３「いやいや、お前じゃ無理だｗ何たって、あのハイスペックオタク人間の

真坂でさえもこの前振られたって噂だぜ？」

女子生徒1「あははっ。ナニソレウケル～！」

いやいやウケないから全然。

てか黙って聞いてれば人様の噂話かよ…。

そう、俺は去年の確か秋くらい、同じクラスメイトだった瀬川奈緒に告白した。

結果は見事に振られたがな。

まぁ当然と言えば当然だな。

俺みたいな2～3次元の美少女が大好きな女たらしなオタクにＯＫの返事をくれる方がおかしい。

しかしそれが未だに噂になっていようとは…。ま、気にしないけどね。

それより気にくわないのが、

男子生徒1「しっかしあのオタク真坂がまさかね～。真坂だけにまっさかー、なんつってwあはははっ！」

男子生徒2「おいおい、真坂に聞こえてるぞ～ｗｗ」

男子生徒３「まっさかぁーあははっ！」
女子生徒１「なにそれチョーウケルンデスケド～！」
いやいや、全っ然ウケないんですけど。
てか人を馬鹿にするのもいい加減にしろよ？
お前ら人として恥ずかしくないのか？

とうとう俺の怒りも頂点に達し、席に立ち上がろうとした。

その時だった。

???「あなたたち！事情はよくわからないのだけど、他人のことそんな風にからかって楽しいわけ？」
男子生徒１「げっ…野澤…!?なんでお前がここに…。」
そう、確かこの人は、この学校の中でも瀬川にも劣らぬ超絶美少女のうちの一人、野澤　奈々だ。
長身でとくに足がすらっとして、
全体的にモデル並みのスタイルのよさだ。周りの女子がガキにしか見えないくらい

に大人びいている。
それが彼女に対しての第一印象だった。
野澤「そんなこと、どうだっていいわ。それよりも真坂君？って言ってたかしら。彼がかわいそうでしょ。
今すぐその話をやめなさい。」
男子生徒1「ああ、悪かったって…。
もうこの話はやめにするよ。」
野澤「それでいいのよ。
あと謝る人を間違えてるわ。
もし聞かれていたと思っているのなら
彼に後で謝っておきなさい。」
そう言い残して教室を去っていった。
あの男子生徒の態度の変わり様をみていればわかるが…、
彼女は滅茶滅茶強い。
こちらも噂話で申し訳ないが、彼女は中学の時スケ番だったらしい。
まぁ今時珍しいものだが。
そのせいもあってか彼女が金髪で登校してきたことがあり、もちろん校則違反であっ

たので先生が3日間ほど軽い停学処分を下した、というのは有名な話だ。
俺も実際に話したことはないので、
どんな人かと思えば……、
真坂「（なんだ、優しくていい奴じゃないか…。）」
素直にそう思えた。
そういえば……、

「あの人」も初めてに会った時は金髪だったっけな。

放課後すぐにさっきの男子生徒らは俺に謝ってきた。
もういろいろとめんどかったので、適当に応対して俺はとっとと下校した。

俺は学校を出ると真っ先に秋葉原へと向かった。
今は秋葉原へ行く用事は一つしかなかった。
その用事とは…、

ピンク一色に染まった壁に囲まれた癒しの聖域……、

今日も俺はその入り口に立つ。

そう、メイドカフェである！

俺の今現在一番のマイブームである。

今日は新学期早々超絶イライラしたかな。

しかしラッキーなことに俺の推しのメイドさんのお給仕日である！

そうだ。俺は今日イライラした分、推しのメイドさんに癒してもらうんだ！

さあ！

ｌｌｌｅｔ，ｓ　ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｅ　ｓａｎｃｔｕａｒｙ!!

「「お帰りなさいませ、

ご主人様!!」」

うおおおおお!!!

帰ってきた感が半端ないゾー!!!

入った瞬間、ふわっと漂う甘過ぎるおのオーラ、その中にいらっしゃる数々の美少女

たち。
うん、ここは俺のためだけにあるような空間だよ。
言っちゃなんだが、あんな学校の血生臭い空間とは大違いですな。
メイドさん１「お帰りなさいませ、ご主人様。こちら『魔法のお水』でございます♪」
真坂「ありがとうございますっ！」
まずは席に着いて『魔法の水』を飲み落ち着く。
メイド１「ご主人様、今日は誰をご指名しますか？」
そんなのは決まっている！
もう１人しかいないだろう。
まぁみんなかわいいけどね。
真坂「『ななみん』さんでお願いしますっ!!」
メイド１「『ななみん』ですね、今お呼びしますので少々お待ちください。」
そしてすぐに『ななみん』さんは来た。
ななみん「おー！なおちゅん久しぶり～!!」
真坂「お久しぶりです！ななみんさん!!会いたかったですよ！」
ななみん「ななみんも会いたかったぞ～～☆。今日はゆっくりしてってね～♡」
ああ、天使だ。

天使が俺の目の前にいるぞ!!
他のメイドさんと違うところは、
タメで接してくれるので、やはり
こちらも気楽にお話できるというところか。
俺が初めてご帰宅した時にはこの口調にだいぶ安心感を得られたものだ。
ななみんさんの素晴らしいところはそれだけじゃない。
長身でとくに足がすらっとして、
全体的にモデル並みのスタイルのよさあってか、メイド服がこの上なく似合っている。
…あれ?今日俺似たようなこと口にしなかったっけか……??
確かあれは……、
真坂「野澤…さん……?」
ボソッとその名前を口にした。
ななみん「……えっ…。」
ななみんさんは少し驚いた様子だった。
真坂「あっ…、ご、ごめんなさい!
俺なんかまずいこと言いました?!」

いかん。いかんぞ！真坂直人！
ななみんさんの目の前で他の女子のことを考えるなんてことは！
まぁ確かに野澤さんに似てなくはない…ていうか驚くそっくりではあるが、あるはずがない。いやそんなことあってはならない!!
あのななみんさんが野澤奈々なんてことはっ！絶対に！（必死）
ななみん「…う、ううん！全然っ！こっちも急に驚いたりしちゃってごみーんね☆」
コツン☆とグーにした手を頭においてとどめのテヘペロ。
ほらみろ。やっぱりななみんさんはななみんさんだ。（謎）
その愛想があまりにも可愛らしかったので、
真坂「はいななみんビームいただきましたー！なおちゅんバッタンキュンッ！ＤＥＡＴＨ☆」
ななみん「なおちゅんの心はこのななみんさんが頂いたゾー！ガオー☆」
などと、自分でも訳のわからない言葉を発しては、ななみんさんもそれにちゃんと返してくれる。
このノリがここ、メイドカフェの楽しみの一つであるのだ。
ちなみに『ごみん』はななみん語の一つであり、ごめんの意である。

『ななみんビームいただきました』は
ななみんさんに萌えた時に、ご主人様である俺が言うものである。これはななみんさんが自分で考えたらしい。
うん、さすが過ぎるね。
そして言い忘れていたが、
『なおちゅん』は俺のことだ。
これもななみんさんが俺につけてくれたニックネームだ。
ななみん「あ、そういえばなおちゅん今日でご主人様カードのランク昇格なんじゃないかにゃ？」
真坂「あ、そうなんですよ！ようやくブロンズからシルバーになれます！」
ななみん「おー!!おめでとー!!
シルバーカードの裏の名前誰に書いてもらう？」
真坂「もちろん、ななみんさん！あなた以外考えられないですよ！」
ななみん「わぁー！ありがと～なおちゅん！ななみんもメタメタ嬉しいよっ!!」
真坂「俺もななみんさんに名前を書いて頂けるなんて、これ以上の幸せが一体どこにあろうか。いやないです!!
反語!!」

ななみん「も～そこまで言われるとななみんさんも照れるゾー♪」
ななみん「すぐに戻ってくるからちょっと待っててね～」
待つこと数分、ななみんは銀色のカードを持ってきてくれた。
ななみん「はい、これがななみんさん特製シルバーカードだよ♪
いつも来てくれてありがと♡」
真坂「うおおおお!!　ありがとうございます！ななみんさん!!!
俺一生大事にしますねぇぇ!!」
ななみん「うん、そういってくれるとななみんもメタメタ嬉しい♡」
あ～～今にも俺の心が全て浄化されそうだよ～～。もうななみんさん需要しかないよ～～。
ななみん「あ…ごめんねなおちゅん…。もうそろそろご出発の時間になっちゃった…。」
真坂「あ…楽しい時間ってあっと言う間ですね…。」
ななみん「うん…でもまたすぐにでもおいでよ。ななみん待ってるから。」
真坂「はい！またすぐに行きます！」
ななみん「うん…。ありがと。
あ、はいこれ。今日のチェッキのお写真。」

写真には俺とななみんが写っていた。
既に2ショットの写真は4枚持っているのでこれで5枚目となる。
真坂「ありがとうございます！これも部屋に大切に飾らせて頂きます!!」
ななみん「ありがとう！まぁ来たらいつでも一緒に撮ってあげるから♪」
ななみん「じゃあ、またね！今日は
楽しかったよ。」
真坂「はい！俺もこれ以上にないほどに楽しかったです!!」
ななみん「うん。私も。じゃあ…」
ななみん「いってらっしゃいませ、
ご主人様っ♪」
俺はななみんさんのその笑顔を出口の自動ドアが閉まるまでずっとこの瞳で見つめてた。

至福の時間が幕を閉じた。
まるでいい夢を見ていたかのようだ。
メイドさんはあくまで仕事なので、
ななみんさんがホントは俺のことをどう思っているのかはわからない。

悔しいが他にお給仕してもらってるご主人様もいるわけだしな。
だけど彼女が俺に見せてくれた笑顔は本物なんだと俺は思ってる。いや、少なくともそう信じたい。

次の日
今日は学校で席替えが行なわれる日である。
まぁ席替えなんて微塵も興味ありやしないけど。
教室をあたり見回すと、そこには昨日俺のことをかばってくれた野澤奈々がいた。
あいつ、俺のクラスだったんだな。
後でちゃんとお礼しないとないとな。
この席替えが俺の人生を１８０度回転させることになろうとは、この時の俺、
いや俺たちには知る由もなかった。

ご帰宅2回目！

俺は席を立ち、席替えのくじを引きにいく。
今日も学校が早く終わるのでさっさとくじを引いて、また秋葉原のメイドカフェへ行く予定だ。
女子生徒1「キャー！○○ちゃんとお隣の席だー！やったー！」
男子生徒1「うおおお！やったぞ!!○○さんと席近いぞー！」
たかが席替えくらいでみんなギャーギャーいちいちうるさいのだが…。
全く、精神年齢が低くて困る。
ここには小学生しかいないのか？
ま、俺もななみんさんのお隣の席だったらどれだけ良いことか…。
そう思いつつ、くじを引いた。
真坂「14番…。てことは真ん中の一番後ろの席だな。ふああぁ～…。」
俺はあくびをしながらその番号の席へと向かった。
そしてその席の隣には……、

野澤奈々が座っていた。

ご帰宅２回目！

元スケ番で金髪の時期もあったらしい学校の超絶美少女の１人。しかし人は見た目だけでは決まらないものである。

昨日彼女に助けてもらったのは事実だしな。

とまぁ、まずは挨拶からいこうか。

ついでに礼も言わないと。

真坂「はじめまして。野澤さんですよね？」
野澤「そうだけど。あたしになんか用？ふあぁ～…。」
眠いのだろうか、なんだがめんどくさそうにそう言った。あくびもしてるし。
初対面の相手にそれはちょっと失礼じゃないかとは思ったけど、かわいさに免じて許してやろう。
こんなこと口が裂けてもいけないがな。
真坂「俺は真坂直人。昨日はありがとう。野澤さんって優しいんだね。」
と、とりあえずお礼も兼ねて褒めることにした。
褒めて誰も嫌な思いをする人はいないからな。

野澤「あー、あなたが真坂くんね。
あたしは別に…近くをたまたま通りかかっただけだし。そしたらちょっと頭にくる発言する輩がいたから注意してやっただけなんだから。」

と思ったが、
実際はそうでもないらしい。
褒めてもあまり効能はなかったとまやた。

この結果と今の発言から推測するに、
彼女はいわゆる「ツンデレ」または「クーデレ」といったどちらかの人種だろう。
まだ「デレ」をみせてないから断言できないが。
ちなみにツンデレとは、普段はツンツンな敵対的な発言だったり、（特に好きな異性に対して）素直になれなかったりする言動を示すが、時々ある条件下においては好きな人に対して過度に好意的、つまりデレデレする人種のことだ。（諸説ある）
クーデレについては…グープル先生に教えてもらうことをおすすめする。
インターネットの知識は偉大だぞー、なんでもすぐに教えてくれる。
決して説明するのがめんどくさいなどと思ってはいない…思ってないんだからね！
（大事なことなので…ｒｙ）

しかし２次元の美少女にはよくいるのだが…
３次元の美少女でツンデレやクーデレはなかなかレアだぞ。
さて、どう立ち回るか。
ここは恋愛シュミレーションゲーム、俗にいう「ギャルゲー」をやり込んだ俺の腕の見せどころだな。

そうだ、俺だってただ単に美少女だが好きなだけでギャルゲーをやっているわけではない。こういうシチュエーションになることも想定した上でだなぁ……、……ホントだからな!!?

真坂「野澤さんはさ、なんか趣味とか特技ってあるの？」

野澤「ない。」

即答ぅ～～!?

なんなんこの子、俺と意思疎通というものをこれっぽっちも図ろうと思ってないぞ。

さすがに傷ついたわ。

まぁ…気を取り直してテイクツーいくか。

真坂「そ、そっかぁ…あ、その筆箱かわいいね。」

野澤「あらわかってるじゃない。この筆箱、私のお気に入りなの。」

お、これには引っかかったぞ。

真坂「うんうん、すごくいいと思うよ。」

野澤「でも意外だわ。こういうのって女の子にしか受けないと思ってた。」

真坂「いやいや、そんなことないぞ。かわいいものはやっぱりかわいいし、特に俺はびしょ…かわいいものだったらなんだって好きなんだから。」

野澤「それはわかるけど、なんでそんなかわいいものにこだわるのよ。」

真坂「そんなの決まってるだろ?『かわいいは正義』。かわいいものを愛でるのは俺にとって呼吸してるのと同じくらい至極当たり前なことなのだよ！」

野澤「…やっぱり変わってるわ。よくそんな恥ずかしいことが言えるわね。」

真坂「変人だと思ってくれて構わないさ。それでも俺はかわいいものを追い続けるけどな！」

野澤「…あっそ。」

野澤さんはそう言ってそっぽを向いた。

これには意外な反応だった。

当然といえば当然だが、俺がこういうことを口にすると大抵の人間は一歩下がってしまう。特に女の子には。

しかし野澤さん、彼女は興味のない素ぶりは見せたが…それを否定する態度は見せなかった。

まぁ心の中では気持ち悪いと、多少は思われているのかもしれないが。

会話が途切れてしまったのも事実だ。

俺も俺でわざわざそんなこと口にしなくてもいいのではないか、と思われがちであるが…。

でもそんなことはない。

ーーどんな時にでもありのままの自分でいる、ありのままの自分をみせる。

俺はあの日以来、そうするように…そのような人間であるようにと心に決めたのだから。

その日の最初の授業があったがそれもすぐに終わり帰る準備をしていると、

伊原「あ、真坂くんいたよ。」

浜田「お、真坂！一緒に帰ろーぜ。」

この２人は浜田拓人と伊原蓮。

伊原は去年の春、ここの高校で知り合った俺の友達だ。

この３人の中じゃ１番まともな人間であろう。少なくとも世間の目からしてみたら、な。

そして浜田は俺の１番好きなＴＶアニメ『ニャブライブ！』の映画を観に行った時に映画館で知り合った。

なんでもその映画は上映中騒いでも良いという、いわゆる『絶叫上映』ってものに俺らは参加していた。

上映中に俺がコールをしながらペンライトを２本同時に振っていると、前の席にいたある男が振り向き彼はこう言った。

「おい、そこのお前。ペンライト一本貸せ。」と。

忘れもしない、
それが浜田拓人という男の第一声だった。
その後まさか俺と同じ歳で同じ高校でしかも同じクラスになろうとは…。
偶然過ぎて驚いたが、どうせなら美少女とそんな偶然の出来事が欲しいね。
こんな野郎とイベント起こしても需要なんてないし。まぁ浜田本人の目の前でさすがにそれは言えないが。

鞄を肩に背負い、俺たちは教室を出た。

伊原「3人で帰るのは久しぶりな気がするね～。」
真坂「ほんとそれなー。」
浜田「てか真坂さ、」
真坂「ん？」
浜田「お前、一体どんな魔法使ってあいつと喋ったんだ？」
真坂「は？なんだよ急に。てか誰だよあいつって。それとどっかのアニメで聞いたことある台詞なのだが、その台詞…。」

浜田「察しろよ鈍感…。野澤奈々だよ。」
真坂「野澤さん？」
浜田「ああ、そうだ。あいつが他の男子と喋ってるところ初めてみたぜ。」
伊原「浜田くんは野澤さんと同じ中学だったんだもんねー。」
浜田「おうよ。中学ん時の野澤は学校で1番強かった、なんて噂だ。しかも美人加えて超絶クールときた。俺らみたいな一般ぴーぽーには口を聞けることすら極めて難しい高嶺の花…。」

浜田「…のはずなのだが！何故お前は平気な顔で野澤と喋ってんだよおおお!!!」
伊原「確かにこの学校の5本指に入るくらいの美人さんかもね～。」

真坂「そんなにすげえのか。美少女好きである俺も野澤さんの美人さは知ってたいたが、まさかこれほどだとは。くそぅ、俺もまだまだだな…。」

浜田「はっはっは！同じ美少女好きとしてあの真坂に一歩リードできた気分で鼻が高いぜ！」

真坂「今回の勝ちはお前に譲るわ、浜田。」

浜田「じゃあ勝者の俺に野澤さんを…！」

真坂「調子のるなハゲ。」

浜田「ハゲでもいい！美少女をくれええええ!!」

みんな、覚えておくといい。

美少女好き変態２人が会話するとこうなる。このように現在非リア充、略して『非リア』な野郎が集まると特に。

伊原「ははははっ、バカな２人をみてると僕も楽しいよ。」

真坂「バカは余計だろ、伊原。まぁ否定はできないけど。」

伊原、お前だけは健全で常識人のままでいてくれ。でないと俺らは本当の意味で終わる。社会的にな。

浜田「だいたい伊原は朴念仁過ぎるんだ。もっと年頃の男子だったらなぁ…、」

伊原「あ、ごめん。２人とも。」

真坂「なんだよ。」

伊原「僕、昨日彼女、できちゃった★」

真坂・浜田「…へ??」

一瞬、この場が凍りついた。

浜田「おいおい、それ魔剤ンゴ（マジ）？」

真坂「なぁなぁ浜田、この男処す？処す？」

伊原「テヘペロ★」

浜田「よし、わかった。伊原のリア充記念に東京湾に沈めてやろうじゃないか。問題ないな、同志真坂よ。」

真坂「ああ、今俺らの心は一つになってる！伊原、今のお前は全世界の非リアの敵だ。」

伊原「き、君たちもかっこいいんだしこの気になればすぐに彼女できるよ。まずはヲタクを…」

真坂・浜田「フォローになってねーんだよおおおおおおおお!!!」

そんな非リアの叫びが心だけでなく近所の家にも響き渡った、そんな放課後の帰り道であった。

ご帰宅３回目！

俺、真坂直人は伊原と浜田と別れた後、家に帰った。

真坂「ただいまー」

「ん？誰もいないのか？」

家の階段を登り、自室へと入る。

しかしそこには…

修平「あ、キモオタなおちが帰ってきた」

俺の兄貴、真坂修平がいた。

まさか俺の推しメイドがこんなに近くにいたとは。（ご帰宅3回目！）

修平「なあなあ、今日はアキバでオタオタして来ないの？ん？どうなの？」

プロレスの首絞めのように後ろから腕を俺の首に絡めてきて、
俺にベタベタくっついてきた。
しかも髪の毛をくちゃくちゃにしやがるし。

これを毎日のようにやってくるが正直鬱陶しい。

真坂「今日はななみんさん休みなんだよ！てかもう俺の部屋にいないで自分の部屋に戻れよ！」

修平「でた、ななみんさん。メイドさんでしょ？そんなところ行ってるからモテないんだよ。」

正論である。

真坂「しょうがないだろ、かわいいんだから。」

修平「キモーい！これだからキモオタなおちは…。」

これもまた正論である。

真坂「それお前のオタクの友達にも言えるのか？」

修平「違う違う。お前がオタクであることに対してキモいって言ってるだけだよ。他の人は別にいいの。」

真坂「なにそれ…。じゃあ俺がオタクじゃなかったら？」

修平「それはそれでキモい。」

真坂「どっちみちキモいんじゃねーかっ!!」

もう嫌だこんな兄貴…。

いや、兄弟にしては仲の良い方かもしれないが。

それでも俺は思う。

こいつが美人お姉さんだったらどんなに良かったことか…。

とな。

次の日の朝も相変わらず学校に行く。
日直であることを思い出したので今日はいつもより学校へ…と思った時にはもう遅かった。
今の俺は遅刻寸前であった。

電車降りたら自転車に乗り、猛スピードで学校へ向かった。

真坂「ふぅ…。思ったより余裕があってよかったぜ。」
着いた時間はＨＲ（ホームルーム）の１５分前。これなら全然問題ないだろう。
…日直の仕事はちょっとできるか怪しいが。

しかし、教室へ着くともう既に仕事が終わっていた。
真坂「もしかして…。」

俺は自分の席に鞄を降ろし着席した。

真坂「おはよう。野澤さん。」

野澤「お、おはよう。」

真坂「もしかして日直の仕事全部やってくれてた？」

野澤「まぁね。あれくらい1人でもできるし。」

真坂「朝寝坊しちゃってさ、日直の仕事任せるようなことになっちゃってごめん。」

野澤「別に謝る必要ないわよ。たいした仕事じゃないし。」

真坂「でもおかげで助かったよ。ありがとう。」

野澤「…どういたしまして。」

野澤さんはそっぽを向きながらそう言った。

４限の授業も終わり昼休みに入った。

伊原と浜田を呼び、いつも通り野郎3人で机を囲って飯を食べる…
はずだったが、

野澤「ねぇ。」

真坂「ん？どうしたの野澤さん？」

野澤「あのさ…、その…私も昼飯食べるの混ぜてもらってもいいかな…？」
浜田「いぃ?!」
真坂「え?!」
伊原「おー」
野郎3人ともこれには驚いた。

まさかあの美少女野澤奈々から飯を誘ってくるとは。

真坂「マジ?!是非是非！歓迎するよ！」

野澤「あっ…ありがとう。でも勘違いしないでよ。別に1人じゃ寂しいってわけじゃないんだから。」

真坂「わかってるって。でも寂しかったのは俺らも一緒さ。野郎3人で飯を食べてさ。「おいどういう意味だぞ…」君はまるで荒野に咲いた一輪の花だよ！」

野郎の発言をスルーして正直なことを言った。

野澤「もう大袈裟なんだから…。」

こうして4人で弁当を食べた。

一輪の花を添えるだけで弁当がこんなにおいしく感じることを知った真坂直人で

あった。

授業が終わり放課後になった。
今朝は俺のミスで野澤さんに1人で日直をやらせることになってしまったので、放課後の日直を1人でやると野澤さんに伝えた。
なぜかめっちゃ感謝されたが。
何か大事な用事でもあるのだろう。

例えば…彼氏とデートとか？
あり得る。というか逆にいない方がおかしいだろう。
もし居たとしたら、悔しいがきっと俺なんかよりイケメンで、ハイスペックで…。
あーもう何を考えているのやら。
しっかりしろ！俺！
俺は美少女を眺めているだけで幸せだし、今はななみんさんだけで充分なんだ！リア充したいけど、彼女欲しいけど、振られたあの日からもう今のままでもいいんだって思

うことにしたんだ！だから忘れようううんそうしよう。

などなど変な妄想と自問自答していたらあっという間に終わった。

あー今日のななみんさんのお給仕、間に合わないのか…。

俺は落胆しつつ、なんとなくＳＮＳを開いた。

真坂「ん??」

ななみんさんのコメントに

「ごめんなさい！今日のお給仕遅れちゃいます！代わりにラストまで居るね♪」

とかかれていた。

なん…だと…?!

これは行かねば…！

俺はすぐ帰る支度をし、
秋葉原へと向かった。

そして我らが聖域、ｓａｔほぉ～むカフェに着いた。

待ってろよ、ななみんさん…!!

今日もいざ出陣っ!!
そう思って一歩足を運んだその時、
ーードンッ!!

真坂「うわっ！」

???「きゃあ！」

誰かにぶつかった。

???「いたた…、だっ、大丈夫ですか?!…ってあ……。」

真坂「は、はい。全然平気です……って、え……??」

俺はその美少女の顔をみて一瞬時間が凍てついたかのように固まった。

真坂「どっ…どうして野澤さんがここに…?」

野澤「そっ、それはこちらの台詞よ。真坂くん。」

真坂「俺はこの建物に用事があって…。」

野澤「わ、私もこの建物に用事があるのよ…。」

２人無言になって建物に入り、

…。まさか。

２人無言になってエレベーターに乗り、

……。まさかまさか。

２人無言になって同じ階のボタンを押す。

……。まさかまさかまさか。

そして２人無言になってメイドカフェの入り口の前に立ち……、

「お帰りなさいませご主人様♪」

そして、帰宅したのであった。

メイドさん「ななみーん！遅いから心配しちゃったよ！あとご主人様に挨拶、しな

きゃダメじゃない。」

野澤「お…お帰りなさいませ…ご、ご主人様…。」

真坂「ど…どうも…。な…ななみんさん…。」

俺の推しメイドななみんさん。

その正体は俺の隣の席に座るクラスメイトにして学校の5本の指に入るほどの元スケ番美少女…

野澤　奈々であった。

俺は驚きを隠せず、しばらく口が開きっぱなしでいたという。

こうして俺とその推しメイドの波乱の物語は幕を開いたのである。

ーーまさか俺の推しメイドがこんな近くにいたとは。